





イラスト／後藤寿庵



現存 斬首刑

死刑

地域…世界全域
時期…不明

斬首は宗教的儀式の名残が非常に強く感じられる処刑法である。また、総論で紹介した湯死刑のように被害者を自然に任せ、偶然刑とは対極の、人間の手で確実に殺害するという点にも

大きな特徴がある（ただし、斬首の回数を一回と定め、失敗した場合は許された地域もある）。

斬首は「首狩り」という別称で世界中で儀式化されていた事が確認されている。最も有名なのは、南米ペルーのマラニョン川流域（アマゾン川の上流域にあたる）に住んでいるヒバロ族（もしくはシュアル族）だろう。彼らは入手した頭部から頭蓋骨を抜き取り、乾燥させた干し首（ツァンツァ）を作る過程を宗教的な儀式にしていた。また、完成した干し首には敵対する復讐の霊を封じる呪力があると信じられていた。この風習がヨーロッパに伝わると、好事家達が争って干し首を欲しがったので、ヒバロ族は干し首を作る目的で他の部族と戦争を始めるという凄惨な事態を引き起こした。

逆にインドネシアのボルネオ島（カリマンタン）のダヤク族は、狩った首から頭蓋骨を抜き出して文様を彫り込んだ。これも悪霊を封印する目的があった。ダヤク族の風習はつい数十年前まで残っていたそうだが、この部族の女性と肉体関係を持った男性が結婚を拒否すると、一族の男性が彼を襲って殺害し、頭部を切断したという事件があったようだ。

同様に近年まで首狩りを行っていたことが分かっているのが、ミャンマー、ラオス、中国雲南省の山地に住んでいるワ族である。ワ族が首狩りを行う目的は豊作祈願で、このため毛髪が多

